1.　漢字は既(すで)に日本の字

筧　泰彦　私は哲学、倫理学が専攻(せんこう)で言語学には素人(しろうと)ですが、毎日使ってゐる日本語のことですから、一つお伺(うかが)ひしてみたいと思ひます。それは、石井先生のおっしゃった漢字ですが、私は今日本人が使ってゐる表記は真名(まな)と仮名(かな)だらうと思ふ。真名といふのは中国から来た字で、漢の時代に多く決まったので漢字と言ってゐるのでせう。日本語の表記に当って、昔の日本人は中国からきた漢字を学んでやってみたのですが、どうしても漢字だけでは上手(うま)くゆかない。仕方がないから、漢字の草体(そうたい)を使ったり、扁(へん)や旁(つくり)をとったりして仮名を発明し、これをまぜて文章を書くやうになった。さてその漢字ですが、日本人はそのうちに峠(とうげ)とか近頃では俥(くるま)とかいろいろ中国に無い字を発明した。かういふ字は五十数種あるさうです。漢字の御話しがあったのですが、これからもどんどん漢字ではないかも知れないが「真名(まな)」を作っていっていいのではないかと思ひますが、どうでせうか。

石井　それは全く同感です。当用漢字の最もいけない事は、漢字の使用を制限したことです。漢字はその時代時代の必要に応じて新しい字が作られて今日に及んだもので、現在でも新しい観念を表す新しい字を作る必要があると思ひます。しかし、これでは新しい字は作れません。日本の漢字は実は漢字ではないのです。日本語を表す“日本の文字”だといふことです。欧米の文字学者（例へば岩波新書『文字の歴史』の著者イギリスのムーア･ハウス）によれば、文字は言葉に関係なく作られて、だから、これを“表意(へうい)文字”と言ふ。やがて言葉とつながりが生じ、ここに“表音文字”が発生する理由がある。だから、表音文字は表意文字から発展したものだと説く。これはローマ字を国字とする欧米の学者がローマ字を美化するための謀略(ぼうりゃく)です。どの民族でも自分の言葉を何とかして後世に伝へたいといふことで文字が作られたわけでせう。だからそれは表意文字ではなくて、表語文字であり、表語である以上、音声と意味と両方を具(そな)へてゐたはずです。ですから、それは表意文字であると同時に表音文字でもあるわけで、これは漢字に限らず

創作された文字はすべて（スメルの文字でもエジプトの文字でも）さうです。アルファベットはフェニキヤからギリシャ、ローマを経て世界中に普及してゐますが、その元はスメルの表語文字に由来します。およそ、文字を持たない民族が先進国の文字を借りる時は例外なく、その文字の持つ意味を捨てて、その発音だけを借りてゐます。例へば、我々は漢字の“安”を“あ”といふ発音を表す字として借りましたが、フェニキヤはスメル文字の“∇”（牛の頭の象形で、牛の意を表した字、アレフと発音する）を、“ア”といふ発音を表す字として借りました。このやうに表音文字なるものは、後進国が先進国の文字を借り入れる時に必然的に発生する現象です。表音文字は言葉そのものを直接に表現する文字ではなくて、表音といふ手段により、表意の目的を達するのでどうしても伝達機能が良くありません。そこで我が国では逆に漢字の音を捨ててその意味を探り出し、一つ一つの自国語にあてはめるといふ努力をしました。これが日本における漢字の用法です。ですから漢字は完全に日本語を表す文字に生れ変ってゐます。例へば人といふ字はニンといふ発音でヒトといふ意味を表す字ですが、我我はそれを「ひと」といふ日本語を表す文字として使ってゐるのです。表音文字は音韻（おんいん）の数だけあれば足りますが、これは言葉の数だけ要るので大変な事業です。だからかういふ大事業をやってのけた民族は世界史上でもただただ日本だけです。それは勿論（もちろん）日本民族が優秀だったからといふこともありませうし、又、四方を海に限られた平和な島国の中だったから文化が熟成できたのでありませう。ですから私は「訓（くん）読みの漢字は、日本人が発明した日本語を表す文字である」と考へてゐます。漢字はその素材に過ぎません。

〔参考〕 鮎はわが国では“あゆ”ですが、中国では“なまづ”ですし、椿（つばき）や桜も日本と中国では全く別物です。